

## 「名人」は道德科授業のどこを観(見)ているのか？

島 恒生(畿央大学)  
渡邊真魚(日本大学)

### 1 はじめに

第10回オンラインセミナーは、2024年10月6日(日)13:00から、『「名人」は道德科授業のどこを観(見)ているのか？』をテーマに、会員以外のみなさまにも御参加いただき、学会活動を広く知っていただく機会となりました。また、今年度から年3回開催されていたセミナーを年2回とし、代わりに3時間の枠でたっぷり道德教育に浸りながら意見交流する時間帯となり、今回は初めてZoomでのグループワークを取り入れるなど、新たな試みを取り入れての実施となりました。

本セミナーの目的は、道德科授業の「名人」と称される実践家は、ご自身の授業の何を見ているのか、あるいは、他の人の授業を見ると、どんなところを見ているのかといった道德科授業を観(見)る目について話題提供いただき、後半は、座談会形式でその視点や意図を明らかにすることです。

そのため、参加者のみなさまにも御協力いただき、グループワークで授業を観(見)る視点について語り合っていたいただき、授業を観(見)ることが道德科の授業創りにどのように寄与していくのかを、みなさまとともに考える時間を確保したいと考えました。

### 2 話題提供と質疑応答

#### (1) 兵庫教育大学附属小学校 中野浩瑞 会員

中野会員は、道德科授業は「自分を知るための時間」だからこそ、授業者として他人の授業を観(見)ることで、自分の観(見)る目が養われて力量が形成されるという立場で、具体的には、ご自身の授業を観(見)る場合と他の授業を観(見)る場合に分けて報告いただいた。

特に、自分の授業を観(見)る場合は、子供が自己をどのように表出しているのか、その姿をヒギンズの「現実自己」、「理想自己」、「義務自己」に重ねて、子供が自己を見つめる姿から現れる自己は、自分を見つめる時間になっているのかという視点で授業報告がなされた。

また、このように考えて授業をした場合に生じる対話のずれの要因として3点「教師の意図と子供の受け取り」、「教師が予想する子供の発言」、「教師の教材理解と子供の教材理解」を挙げながら、教材「けんかをしたけど」(小学2年)を通して、主人公はなぜ仲直りしたかったのかという意図で、「この子じゃなきゃだめなの？」という切り返しの発問をした際、「仲直りしたいと感じた生活経験」を引き出すつもりが、子供たちが「この子でなければならぬ理由」に集中してしまい、意図通りにいかなかった例を踏まえながら、謙虚にご自身の実践を振り返りされていた。

そのうえで、他の先生の授業を観(見)ることは、子供の思考に添った授業構成を知ることにつながり、結果、子供を観(見)る目を養うこと、自分で自分の授業を観(見)ることは、「自分を知るための時間」であること等の話題提供をいただいた。

#### (2) 岩手県盛岡市立厨川中学校 及川仁美 会員

及川会員は、他人の授業を観(見)る経験をひもときながらベテランや初任者という立場で授業を観(見)るのではなく、「子供が考えなくなる授業」が心に残るのは、ご自身の授業創りが「子供が考えなくなる授業」を目指しているからであるとの立場で報告いただいた。

特に、自身の授業を観(見)る場合は、中学生にも「ワクワク」と「もやもや」を味わわせて、子供が本気で考える授業づくりを目指し、道德科授業で育てたい力は、納得解であることをしっかりと見据えて、現実社会の中でリアル感のある学びを実現したい、そのうえで「きれいごと」を超えていく力、(生徒)エージェンシーの発揮をも視野に入れながら授業報告されていた。

また、自他ともに授業を観(見)る視点は、考える「意義」がある課題かどうか、必然性のある課題、すなわち、授業において生徒が「思わず考えなくなる」課題が存在するかであるため、その問いは、ときに「教材全体」から生まれた問い(内容項目)であったり、ときに「仕掛け」から生まれる問い(興味・関心)であったりと、生徒を巻き込みながら真摯にご自身の実践を振り返っておられた。

さらに、ユニット(複数時間)で実践したテーマ「ふつうってなんだろう？」では、ユニットを貫くテーマを設定して3時間の動機付けを行い、また、各教材でも「問い」を設定しながら、湧き上がる問いの重要性と子供の言葉を拾った形で問いに対する考えを深めていく実践を踏まえて、「課題の必然性」と「子供の心に問いはあるか」を、授業を観(見)る視点として話題提供いただいた。

### 3 座談会の概要

座談会では、島恒生コーディネーターから3つの主な柱「他の人の授業をどう観(見)るのか」、「自分の授業をつくっていくときに授業をどう観(見)るのか」、「自分で授業をしながらどこを観(見)ているのか」を提示し、さらにお二人の視点や意図を明らかにした。

#### ○「他の人の授業をどう観(見)るのか」について

中野会員:子供が自分を語るときは楽しそうに見える。従って「自分に関わることを話す場面」に着目する。子供たちは、自分に関わることを話しているときが楽しいし、わくわくしているし、学んでいる感があるのかも知れない。

及川会員:子供にとって考えたことにより、今後の自分の人生にどのようにつながっていくのかを重視したい。中学生くらいになると、立派なことを言っているけどあまり深く考えていないこともある。その言葉の裏にどんな思いがあるか。それは本当に深いところまで考えて出てきた言葉なのか、ある意味、行間を読みながら観(見)ている。

コーディネーター:中野会員が仰る「子供の思考に添って自分を知ること」や及川会員が仰る「問いをつくりながら次につないでいく」という授業について、お二人は実際に観(見)たことはあるのか。

中野会員:研究授業は、指導案に書かれていることと当日変更されたところを観(見)ている。授業者が子供の発言を拾って、違う問い方に直したり、発問の順序を入れ替えたりしながら、子供の考えたいことや、その考えに寄り添いながら、子供の実態に即して調整する授業を観(見)たことがある。

及川会員:面白いと思う授業は何回もあり、教師が目指している課題に結局はなるのだが、そこでは子供が発言したことを絡めながら、あたかも自分たちが提案した課題のようにもっていくことは、大事なポイントだと考えている。例えば、教師が提示するような課題であったとしても、子供の中から生まれてきたように見せると自分自身が関わっていると子供は思うわけで、そういう授業に出会うと、とてもわくわくする。

#### ○「学級の雰囲気はどのように観(見)ているのか」について

中野会員:小学生の部外者に対する人懐っこさを観(見)ると、人に対してのバリアがなく、こうした学級は、授業にのめり込むし、授業者の先生との関係もよいので、部外者として教室に入った瞬間を観(見)ていることはあると思う。

コーディネーター:まるで参観者がいないかのように、授業が先生と子供たちだけの世界に入っていく感じがある。

及川会員:公開授業をよくされている学校は、生徒が参観者に話しかけてきたりして、すごいと思わせることがたくさんある。私の学校は普通の学校なので、参加者が来たときに緊張してしまう子がたくさんいるので、必ずしも学級の雰囲気は観(見)ていないが、授業者の先生との関係性の中で、ふっと空気がつくられていく瞬間を見ると、何かいい時間がつくれそうだと感じている。

#### ○「思考の流れに添って」観(見)るについて

中野会員:思考の流れに添って観(見)ると、教師と子供がずれている、教材に対しての興味や捉え方がずれているというときがある。実際は、子供はその教材に出会ったとき、教師の意図とは違うところに興味があり、ここから考えたいと思うので、教師と子供のずれが生まれてしまう。これをその場で子供たちがどこに興味を持って、どう考えていこうとしているのかが見取れれば、そこに合わせて修正をしていくことは非常に大事だと考えている。それをせず、教師が想定していた流れで発問を組んでいくと、子供は、急に何かもう考える気力をなくす、そんなところを観(見)ている。

及川会員:問いを子供たちに求めると、求めている方向から迫ってくることはよくあり、そこは諸刃だと考えている。ただ、考えさせたいテーマがぶれなければ、迫り方が多少違っていいくらいの気持ちで、授業するようしている。ぶれないで授業者がおおらかに受け止められるか、そこが堅すぎるとずれてしまうことに不安になっていく。この辺の駆け引き、押し引きは大事なところだと考えている。

## ○「自分の授業をつくっていくときに授業をどう観(見)るのか」について

及川会員:最終的には、授業後も生徒が考え続けるようなテーマであるかというところを大事にしている。義務教育が終わり、大半は高校進学するが、教室の中で考えたことを現実の社会の中でも考え続ける。あのときは、ああ言ったけど、私はこの場面ではどうだろうと考える授業を構成したいと思いながら観(見)ている。

駒-ティーター:軌道修正ができるような指導計画というのは、どうされているのか。

及川会員:指導案は、一応、作成しており、その中で、第二案、第三案を持つようにしている。軌道がずれても、ここに戻ってこられるだろうと思うようなことを幾つか持っている。

中野会員:授業の観(見)方としては、ねじれを見ていくが、子供が考えていくべき方向性と子供が考えていきたいテーマ、この接点をどう見だしていくかが難しい。ねじれがなかったとしても、それは子供が考えたい問いなのか、テーマなのか、やはりそこがずれていると、いい授業にはならなかったりする。

駒-ティーター:問いを子供の必然性の視点で考えたら、この授業で本当に子供たちはこう考えるのだろうかと悩むことはあるのだが、つくっている授業者には、全く見えないときがあるが、この辺りをどう考えるのか。

中野会員:私の場合、他の先生と話していろんな視点をもらってやっと観(見)えてくることが多い。こうした場合、授業の方向性、内容項目に対する理解が不足していて、何のためにこの項目が大事なのか、この学年で何が今足りてなくて、という構造が、自分の中に入らない場合に陥ってしまうことがある。自分の理解のためにも、他の先生と議論すること、経験則から考えることを心がけている。

及川会員:子供が出す問いが、本当に授業者が考えさせたい問いかどうかという整合性の問題も大きくて、生徒に自主的に問いを考えさせると言いながら、こちらがある程度、狙った問いを出していく導入や展開も、やはりベースとして考えなくてはならないところはある。日常の授業で、毎回できないのが現実ではあるが、意外と中学生だからなのか、おかしな問いになった経験はあまりなく、教材がよくできているため、考えさせたいと思うところを出してくることが多いと考えている。

駒-ティーター:取り上げられた問いはいいけど、取り上げられなかった問いを考えた生徒は寂しくなったりはしないのか。

及川会員:あると思う。やはりそこは人数が多い問いを取り上げるときもあれば、そうではないときもある。そうしないとだんだん問いを作らなくなる。時には、今日は授業者の問いで進めていきたいと押す日もある。全部必ず子供の問いでなくても一緒に考える土台に上がればいいと考えている。

## ○「自分で授業をしながらどこを観(見)ているのか」について

及川会員:一番のずれは、別のところで議論が盛り上がる場面だが、その議論が、後々、必要になってくるのか、本当に意味がないのかを見極めることを大事にしている。一見関係なさそうだけれども、後で使えることは結構あるので、この辺りを議論と一緒に参加しながらも、客観的な目で観(見)るようにしている。いろんなことが起こると初めから想定しておくことも必要である。

中野会員:大きくずれたときに焦りが生じることがある。そうならないためには、深い教材理解とか、教材研究に尽きる。例えば、4年生「ブラッドレーのせいきゅう書」では、お母さんは、ブラッドレーからお手伝いをした請求書をもらうのだが、お母さんは、ブラッドレーのためにお世話するさまざまな行為に0ドルという請求書を渡す。この話の子供の捉えは、自分の経験から、「お母さんはちょっと怒っているんじゃないか、微笑んでいると書いているけど心の中では怒っているよね」と読んだりするときがある。教師が事前にしっかりと、このお母さんは怒ってないとはっきり認識していれば、ずれても修正ができるので、教材の分析は大事なことで考えている。

## ○「授業後の振り返りでは、何を観(見)ているのか」について

中野会員:授業者の位置から見えていなかった部分とそれがどうなっていたかを大事にしている。あの子、あの後、何を言おうとしていたか、この文脈で何を言おうとしていたかに注目してリフレクションすることで、次の授業に生かせる実感がある。

及川会員:拾い切れなかった言葉を全部観(見)たいと思っている。見取れない子供が、何人かは出てしまうので、その子の言葉を拾って返していく。あとは、こちらも気づかなかったようなところを意外と書く子供が中学生だといったりして、それを授業中に共有できなかった場合には、後日子供たちと共有して、さらに深めることに使いたいと考えながら振り返りをしている。

## ○「お互いの実践で聞きたいこと」について

中野会員：子供の必然性のある課題をつくる場合、大きい問い、遠いテーマ、題材等で、子供にとって必然性が見だしにくい場合は、具体的にどういふことを意識されて問いをつくるのか、お聞きしたい。

及川会員：中学校だと環境問題はレベルがたくさんあり、どこに焦点を当てて考えさせるかによっても、全然発問が変わってくる。今回はごみ箱の話だが、環境を整え、地球をどうする等の話になってしまい、本来考えなければならないのは自分の足元だというのに、頭ではわかっている、国際理解も、環境も、様々な多様性についてもそうである。常に意識しているのは向こうとこちらではない意識を育てたい。グラデーションの中に自分はいて、円の中、球の中に自分も存在していて、全てのものについて自分も関わっているんだという意識を育てていければ、どんなテーマのときにも子供たちの意識を変えていくことができると考えている。自分も一員なんだという意識を全てのことににおいて持たせていきたい。

及川会員：小学生で自分を知るところにぐっと入り込む実践が面白く、中学生だと客観性を持って自分を見る目が育つと思うが、特に小学校の低・中学年だと、そこが難しいと考えている。中野会員が子供たちの授業の様子を見て、こういうときに子供が育つ、ここで自分を知ると思う瞬間があれば教えていただきたい。

中野会員：具体的な場面を挙げるのは難しい。道徳そのものが、本当に自分を知ることに関わっているからか。それを立ち止まって、自分について考えられる唯一の教科であるので、道徳そのものにその可能性を感じている。自分を知るとは、自分に目を向けなければいけない。何か内省的な思考力が必要かと思うが、これを意識的に働かせて鍛えていかないと子供の中に積み上がっていかない。例えば、内省的に自分を考える経験を全然していない中学生は、自分のことを知ろうとしないわけで、逆に、小学生でもこういう経験を積んでいけば、少しずつ、力が育って、自分をメタ的に見つめる能力が養われると考えている。その一つとして、振り返り活動の充実は避けられないと考えている。

## ○参加者からの質問について

### <当事者意識と自分事の違い>

及川会員：基本的には、私は当事者意識という言葉を使いたい。自分のこととして捉え、主体的に責任を感じて取り組んでいく点で、当事者意識という言葉を理解しているが、自分事は教育用語としてよく使われる言葉として捉えており、他人事に対する自分事という解釈で生まれてきている言葉と考えているが、二つを明確に分けて使っているわけではない。

島-ティネーター：私のイメージでは、当事者意識を持っているが、自分事として考えてない人もいるのではないか。例えば、環境問題で当事者意識は持っているが、自分事に考えていない当事者がいるのではないか。

澤田会員：自分と自己の使い分けを学習指導要領ではしているが、小学校の時期に視点取得というのが成長発達の段階にあるので、自分事という言い方は、各発達の段階で自分にこだわるといふか、そういう年代のところで、その意識が強く意識されているのではないかと考えている。視点取得が発達していくとだんだん変わっていき、中学校の場合には、さらに視点が広がっていく。

### <教職の経験の浅い方に対するリフレクションの仕方>

中野会員：自分の授業を観(見)る際、子供たちに対してねじれた部分を一緒に確認しながら、実際の授業を見て、どこがずれていたとか、これだったら最初に考えるテーマ設定が少し違っていたね等、授業前の構想と照らし合わせながら振り返りをしている。

及川会員：授業者として子供たちとどこまで対話できたかということ振り返ることが多い。よくやってしまうのが、授業を流そうとするあまりに、子供たちが発言したことを板書に書くときに、いつの間にか言葉がすり替わってしまうことがある。子供はそういう意図ではなかった、そういう意味ではなかったということにならないように、子供の言葉をできるだけ正しく受け止めた上で、さばいていくところも振り返りとして取り上げる。

## 4 グループワークの報告

### <Aグループ報告 飯塚秀彦 研究委員長>

話題提供や座談会でも触れられた「子供の思考に沿った授業展開になっているか」という視点について、例えば、(初任の頃は)教師として、授業がどううまく指導案どおりに進んだのか、授業の流れを見ていたが、だんだんと子供の思考というところに視点が移っていった等、先生方のそれぞれの経歴にもよるが、教師の視点が変

化していくことが話題となった。

中でも、もちろん子供の思考に沿うことは大切であるが、道徳科の目標にある多面的・多角的であるとか、自分と重ね合わせて考えるという目標に沿っているかについても、非常に大事であることが挙げられた。また、中学生の場合、子供たちが考えも及ばないような部分を教員が投げかけることもやはり必要な部分ではないか、その意味では、子供の視点に立つことも重要ではあるのだが、教員が指導者として道徳科の特性を踏まえながら、子供に考えてもらいたい視点もしっかり持つておく必要があるのではないかとといった点が挙げられた。

#### <Bグループ報告 田沼茂紀 研究委員会委員>

授業のどこを見ているのかというよりも、質疑応答の中で挙げられた自分事と当事者性の問題が話題となった。確かに自分事ではない道徳科などあるのだろうかという思いもあり、お互い意見を出し合うと、やはり問いが問題になる。問いをどう持つのかに話題が移り、何が学びになったのかについては、本日登壇した及川先生に言及いただきたい。

(及川会員より)

問いをつくる視点で、小学校の先生方から、違和感を生かして問いを立てさせる、価値を広げて子供が今まで持っていたものの中にないものに広げていく視点等を聞いて、学びになりました。また、他の授業を見ると、想定外のことが起こったときに、どんな対応をしているのかに興味があるという意見もあり、ここから学ぶことがあるのではないかとということも話題になった。最終的にどんなことの前にも「人」がいるということ視点を道徳科の実践を続けていきたい。

#### <Cグループ報告 澤田浩一 研究委員会委員>

全国から集まり、ランダムなグループ構成だったにも関わらず、近隣中学校の先生方が一緒になるメンバー構成であった。その意味では、縁があると感じている。また、中学校の先生が二人だったため、中野先生の発表についての感想も皆さんにいただいたが、やはり及川先生の「問いを持たせる」ことが話題の中心となった。

道徳科授業で子供に問いを持たせると、授業の展開が難しい、これをどう考えたらよいかという質問もあり、堺副会長から「授業者も一緒につくるのだから、もっと互いの考えを出し合っていくのがいいのではないか、その意味で、問いを持たせることで受け身になり過ぎないことが大事である」等の御示唆もいただいた。

また、及川先生の「(生徒とともに取り上げた教材の)話題の中にいる」という表現がよく、もう少し説明が聞きたかった等の意見も挙げられた。

#### <Dグループ報告 日向正志 研究委員会委員>

グループ内で現場の先生方から出てきた声として、「授業者が考えている問いと、そこから生徒たちが考える発言のずれ、ねじれ、そういうものが観(見)る視点として、大事になってくるのではないか」、「けれども、やはり、ずれが生じたり、または発言が思うように絡まなかったりする」等の意見が出て、授業者の困り感等、現状における課題が挙げられた。

また、座談会後半で話題になった「学習指導案どおりに授業を進めなくてはいけないのだろうか」について、学習指導案は事前に練られたものだから当然進めるべきものではあるが、そのためには授業者がしっかりと内容項目を理解した上で指導案を作成しないと、想定外の発言が出てきたときにも対応できないのではないかと等の意見が挙げられた。さらに内容項目の理解をしっかりと行うことが学習指導案を作る際に重要なポイントであり、また授業を観(見)る上でのポイントになるのではないかとというような意見もあった。

#### <Eグループ報告 浅部航太 研究委員会委員>

「他人の授業を観(見)る」については、授業者がどのような人なのか、人柄を観(見)ること、また、子供の発言、教師の発言に分けて精緻に記録を取る方もおれば、前から子供の姿(表情)をしっかり観察するという二つの側面からの意見があった。さらに、導入でどのように子供に問題意識を持たせるのか、問いの持たせ方を重視して観(見)ているという点も挙げられた。

「自分の授業をどう観(見)ているのか」については、中心発問後にどう問い返すか等が話題になり、授業者はねらいに到達しているのか、子供に今まで知らなかった、これまでになかった視点が得られているのかという視点で、問い返しの判断をしていること、また、子供の言葉が抽象的で、ある意味きれいな言葉を(表面的に)使っているときに問い返しをすること、さらに、子供の主発問に対する反応を想定して、子供の反応から本当に新しい学びになっているか、そこを意識して授業づくりをしないと、この問い返しの判断は難しいといった意見も挙げられた。

#### <Fグループ報告 渡邊真魚 研究委員会委員(全体進行)>

大きく4点ほど話題があった。子供の発達段階により授業を見る視点が変わるのかについて、発達段階の捉

え方が授業者によって変わると、授業が振り回され過ぎてしまう。そうすると道徳科のよい授業の本質が見抜けなくなってしまうのではないか。また、子供の学びたいという気持ちと教師が伝えたい、教えたいところの一致のさせ方について、子供の学びにシフトし過ぎると、教えることの復権も叫ばれつつある現在、その必要性も考えなくてはならず、このバランスの取り方を、今後、授業づくりに移ったときにどう捉えていくのか。さらに、これらを踏まえて子供の学びをどのように教師がつくっていくのか。そのためには、道徳科授業ならではの学習訓練(学び方を学ぶ)、学習思考をどう子供たちと共通に持てばいいのか等が挙げられた。最後に、振り返りの段階で子供が思いを表出すれば深まりのある学びになるのだろうか、で時間になった。いずれにしても、こうした視点で次の道徳の授業づくりを考えていきたい。

## 5 おわりに

### (1) 島コーディネーターから(まとめ)

「名人」は道徳科授業のどこを観(見)ているのか?という、議論をけしかけそうなテーマで、オンラインセミナーを企画・実施していただきました。

授業に対する観(見)方というのは、人それぞれで、しかも、一方的ではなく多様な観(見)方があることがとても重要です。では、どうやってこの観(見)方、すなわち授業観を高めていくかと言えば、それはまさに、道徳教育や道徳科と同じく、まずは豊かな体験や経験と、そして他者と考え合う場が必要だろうと思います。「名人」ともなれば、多くの授業を自身がしたり他の人の授業を見たりした経験と、様々な場で意見を交わし合い考え合ってきたからこそのものでしょう。このオンラインセミナーも、そのための一つの機会として、学会が企画したものです。

そして今回登壇してくださった中野浩瑞会員と及川仁美会員は、期待通り、多くの視点から話題提供をしてくださり、ご自身が多くの授業をし、多くの人と考えを交わし合ってきたことがよく分かるものでした。お二人に共通するのは、道徳科の特質を押さえながら、子供たちにとって魅力的な授業を創りたいという強い思いをもっておられるところでした。そして、教師の無理矢理の力で子供を変容させるのではなく、子供が自ら考える中でグッと自覚を深める瞬間をつくるために、教師が条件を整え、子供たちの中に身を委ね、全方位を観察しながら、「そのとき」を待っておられることではないかと思いました。これは、理論だけでは説明できない、全身・全霊を注ぐ感性的な部分もあるのではないかと思います。まさに、授業観を「磨く」という言葉がぴったり当てはまるでしょう。

このような磨き合いの場が、学会員のために、今後も作られていくことを切に望んでいます。抽象的なまとめとなりましたが、感じたところを述べさせていただきます。詳しいところは、ここまでの記録をご覧ください。関係者の皆様、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。

### (2) 参加者アンケートから

本セミナーでは、授業実践の話題提供と座談会、さらにグループワークを通して、道徳科授業を観(見)る視点を明らかにする試みを行いました。最後に参加者アンケートの一部(特に印象に残ったこと)を紹介いたします。

- 授業は教師と子供が共に創るもの
- 生徒の表情を見ることで分かることが多いということ
- 授業づくりを考えるため、授業をどう見るのかを考えるという逆向きの発想が大変参考になりました
- 問いの立て方
- 「自分事」とは何か、当事者性とはどう違うのかと、改めて考えを深めることができました
- 話題提供された先生方の「授業を見る」視点が授業づくりに生かされていること
- 「こちら側と向こう側と生徒を分けるのではなく、自分もその中にいるという意識をもたせる」「考え続ける子供を育てたい」
- 「授業を終えたとき、問いが生まれてくる授業かどうか」という言葉は印象に残りました
- グループワークで、授業を観るときの視点3つ「1 子供自身が問題意識をもっているかどうか。2 授業の中で他者の意見を聞こうとしているかどうか。3 子供自身が自分なりに思考を深めているかどうか」が参考になった
- 指導案を固めすぎないことや、実際の授業の中で、生徒の発言から問いを構成していくこと

自他の授業を観(見)る視点は、目の前の子供の学びを見取る洞察力と、絶えず次を見据える授業構想力が循環する中で、授業者が子供の道徳性の発達を促すための確かなビジョンに観(見)えました。

ご協力ありがとうございました。